

藤沢市民会館の建て替えと今後の藤沢の文化の発展について

2020.01.11

川村恒明

- 1 市民会館建て替えの意義
「文化の街 藤沢」を構築する絶好の機会
- 2 市民会館は単なる施設（ハコモノ）ではない
 - ・「公の施設」（「営造物」）としてのハードとソフトの融合体
 - ア 運営に当たって明確な目的・方針を持つ
 - イ 所与の条件を生かし最大限に目的を実現しうる運営人材を備える
 - ウ それを可能にしうる物的及び人的条件を備える
 - エ 税金投入施設として最大限効率的な運営を目指す
- 3 市民会館はできるだけ多様な性格を大切にすべき
 - ・「人の寄り集う場所」は本来的に多様な目的・性格をもつものだが、特定機能重視は不可避
 - ・芸団協の分類：創造型、提供型（鑑賞中心型）、コミュニティアートセンター型（市民参加中心型）、集会施設型など
 - ・重点的機能の選択とその他の機能の保持・調和が不可欠
- 4 新しい市民会館への期待
 - ア 「藤沢の文化の顔」となる
 - イ そのコアとして伝統ある市民オペラを活用、発展させる
 - ウ 文化関係の複合化施設としての総合的運営を目指す
 - エ 施設全体の効率的運営を図る

<メインホールの具体的なイメージ>

- ・1800席程度の座席と少数の専属コーラス・オーケストラ要員の配置
 - 1800席・・・興行的収益性の確保、多彩なパフォーマンスの展開
 - 専属メンバー・・・市民参加との協働、若手人材の育成
- ・多彩な公演を可能とする最新鋭の舞台装置・機器等の設置
- ・効率的で柔軟な運営を可能とする運営体制
 - 市民参加の確保と運営主体の明確化（財団法人、NPO法人等）